

＜日本イギリス哲学会 第116回部会関東例会 報告要旨＞

第一報告：「後期ウィトゲンシュタイン哲学と観念論の関係について —『哲学探究』と『確実性の問題』を中心に—」

（要旨）

本報告においては、ウィトゲンシュタインによって言語ゲームの外側にあると想定されていることに着目し、後期ウィトゲンシュタイン哲学と観念論の関係について考察していきたいと考えている。ここで、ウィトゲンシュタインにおける観念論とは、それを採ることで、我々の言語行為の成立に我々を取り巻く世界が関わっていることを見落とすことにつながるような見方を指していると言える。

ウィトゲンシュタインの前期の著作『論理哲学論考』においては、「語りえぬものについては、沈黙せねばならない」と述べられている。これは、ウィトゲンシュタインが、我々にとって言葉で言い表せることと、言い表せないこととの間に境界線を引き、語りえるもの、つまり、言語によって表されるもの以外のものについては、語ってはならないと捉えていたことを示していると考えられる。だが、ウィトゲンシュタイン研究において、このことは、言語によって表されていること、つまり、我々の言語ゲームにおいて既に登場していること以外の、我々の言語行為を成り立たせている要素に我々が目を向けることを回避すべきだとウィトゲンシュタインが主張していたとは捉えられていない。なぜなら、後期の『哲学探究』の時期において、ウィトゲンシュタインは、そういった要素に積極的に目を向け、我々の言語行為の全体像を捉えることに取り組んでいると考えられるからである。それは、「生活形式」という語によって指される、言語によって表される以前に我々が生活の中で行っていることや、当の言語ゲームが行われている状況に基づいて、我々の言語行為をより正確に理解しようとする取り組みであると言える。

『哲学探究』33節では、ある動きが、チェスの一手を打つという行為であるとみなされるのは、それが正に「チェスのゲームをしている」「チェスの問題を解いている」という状況の中で起こることによってであると述べられている。このことは、ウィトゲンシュタインが、我々が行った行為の意味を決定するものとして言語行為の背景にあたることに注目していたことを示しているということができる。また、最晩期に書かれた『確実性の問題』の考察は、ムーアが「常識の擁護」において、確実に知っていることとしてあげた「ここにひとつの手がある」「地球は私の誕生するはるか以前から存在していた」等の命題が出発点となっている。『確実性の問題』においては、それらの命題が表していることは、「知っている」ことの言語ゲームの外にある、我々の言語行為を成立させるため疑いを免れている「世界像」という形で考察されている。このことから、ウィトゲンシュタインが、言語ゲームの外側にあたるものとして捉えていたことが、『哲学探究』と『確実性の問題』の時期においてそれぞれ異なったものであることを読み取ることができる。

ウィトゲンシュタインが、『哲学探究』において、個々の言語ゲームにおいてその意味を決定する背景にあたることに注目していたことが、『確実性の問題』において、「世界像」という名前を与えられ、我々の言語行為を成り立たせるため、疑いを免れていることとして意識されることにつながっていると捉えることが可能である。だが、その説明にあたっては、ウィトゲンシュタインが我々の言語実践を境界を持たないもの、自然史的な仕方では捉えられる現象として理解していたこと、そのため、ウィトゲンシュタインの考察は観念論と实在論のどちらにも関わっていないものとして解釈されるべきことを示す必要があると考えられる。

本報告では、ウィトゲンシュタインの後期以降の著述『哲学探究』『確実性の問題』を中心に、ウィトゲンシュタインの考察と観念論との関係はどのように捉えられるのか、可能な限り明らかにすることを目指す。

第二報告：「イデオロギーとしての道徳—真の利益、幸福、革命」

（要旨）

かつて、「道徳はイデオロギーである」というマルクス主義的な道徳批判が、今よりも真剣な語調でもって、英米圏の倫理学のひとつの主題を構成していた。そこでは、リベラリズムといった道徳が、支配的な資本家階級の利益によって決定されたものとして、資本主義的構造を促進するものとして、批判の対象となっていた。こうした道徳批判がいまや後景に退いた事情については、多くの説明がありうるだろうが、明確に問題となっていたのは、そのイデオロギー分析に内在する困難であり、あるいは、批判が依存するところの階級の概念が、そのリアリティを失ったといった事情であろう。とはいえ、そのような衰退が、正当なものであるかどうか、イデオロギー批判が忘れ去られるべきものであるかどうかは、未決の事柄であるようにも思われる。

本報告は、かくて、イデオロギー批判の可能性を検討するものである。本報告は、それが成立するひとつの可能性を分析するとともに、それが現実に応用可能なひとつの道徳を見出そうとするものである。本報告が達成すべき作業は、イデオロギー批判を構成する、利益、有害さ、錯誤といった概念——とりわけ錯誤によって隠蔽される真の利益の概念——を分析することであり、それを具体的な道徳文化に応用することを説得的に示すことである。

本報告の構成は以下の通りである。まず、イデオロギーとしての道徳批判の構造を概観しつつ、そこで主題化される有害な錯誤を分析するために、利益の概念、とりわけ主体が錯誤によって認識できていないような真の利益の概念が必要となることを指摘し、それを、利益を追求するための人間的能力から分析する。さらに、そこで要求される人間的能力のひとつを、価値の変革・創造能力として特定し、それに基づいてイデオロギー批判の説明を練り上げる。最後に、価値の変革・創造能力を剥奪するイデオロギー的道徳として功利主義・効果的利他主義を挙げつつ、本報告の立場と一致するような効果的利他主義への批判（「制度による批判」）を検討し、それに対する効果的利他主義の支持者からの反論に応答する。

渡辺 一樹（学習院大学・非常勤講師）